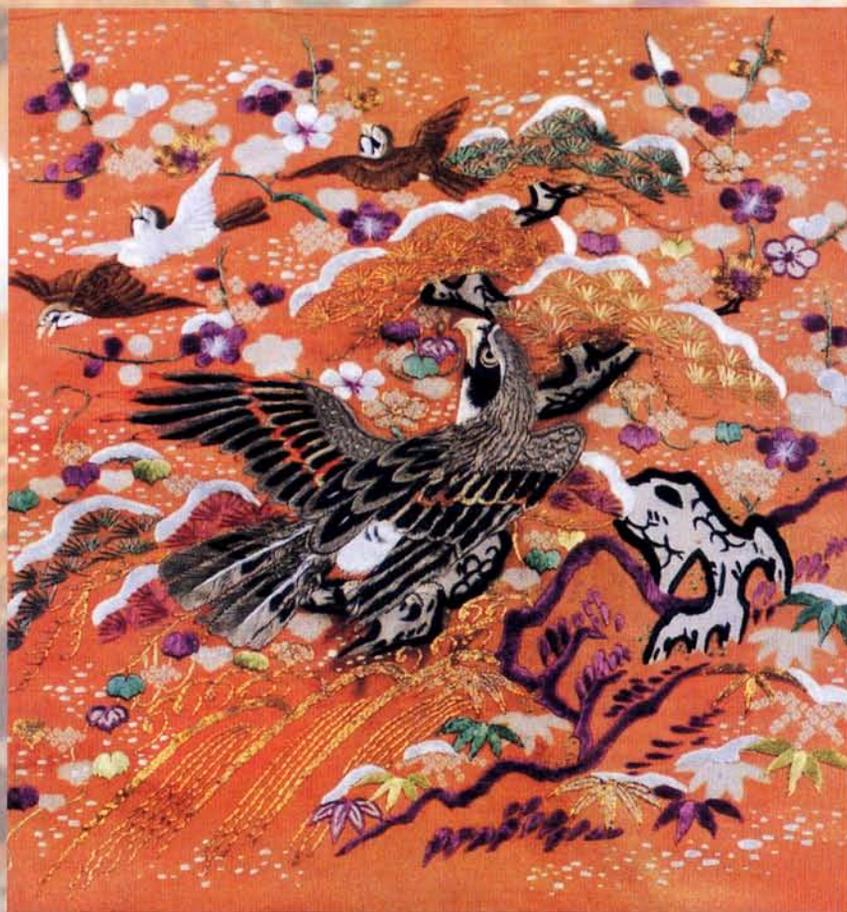


紅花資料館

よみがえりくれなげ紅花



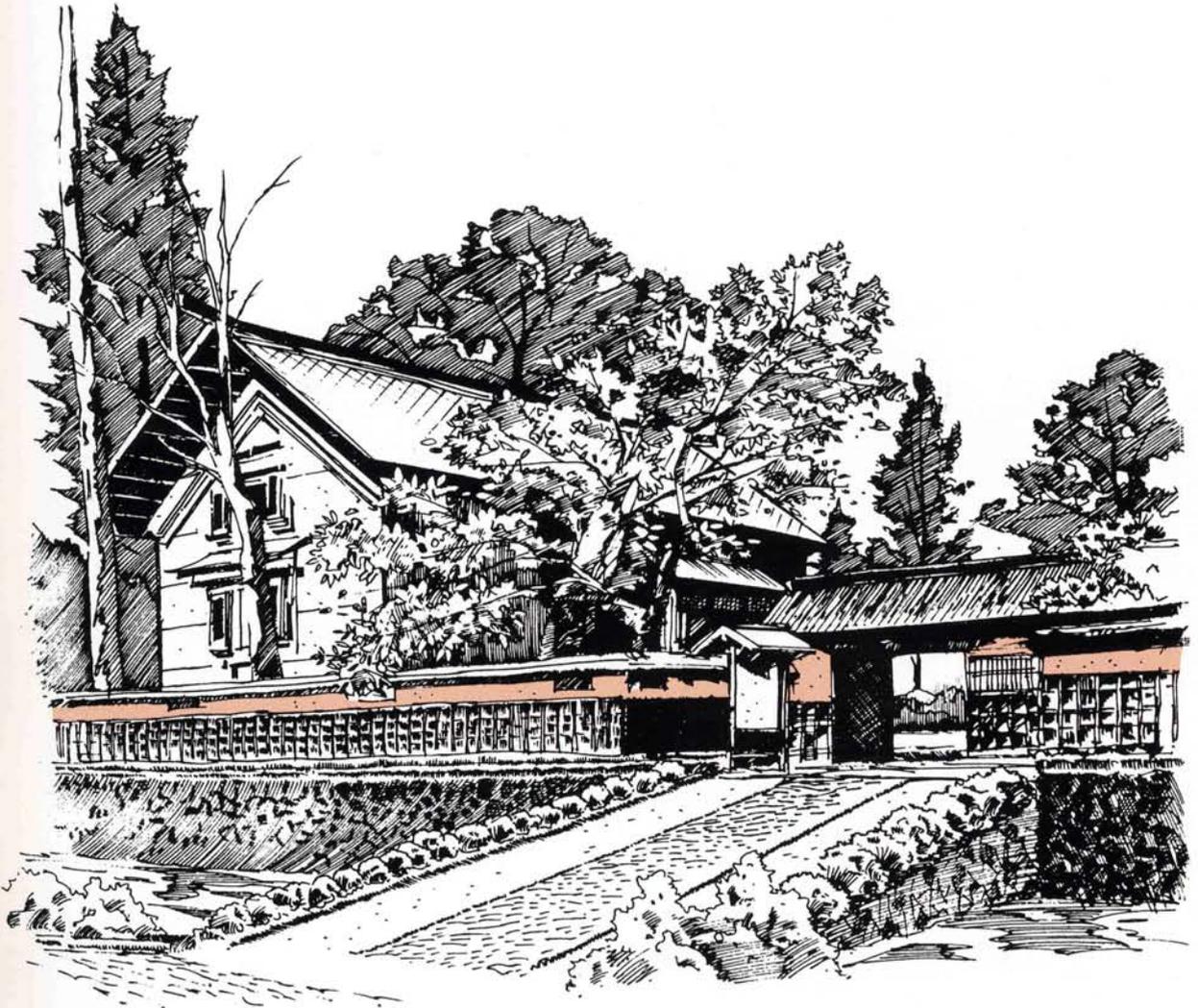
山形県・河北町

べにばな 蘇った紅花

河北町は「べに花の里」です。江戸時代には、特産の「最上紅花」（昔は村山地方を最上といました）が植えられ、可憐な花びらは紅餅（花餅）となって、はるばる京都へ送られました。そして、京都の紅屋の手によって紅餅から真っ赤な紅がつくられ、それが京おんなの唇を彩るとともに、紅色の美しい衣装を染めあげました。神秘的とも思える紅の美しさは、いつの時代も女性のあこがれのまどでした。

それほどまでに貴ばれた紅花でしたが、明治になると外国産の化学染料に押されて姿を消してしまいました。しかし、その後も宮中や皇太神宮の式典で用いられる服装はいつも本県産の紅花で染められ、紅花はひそかに生きてきました。

昭和56年に「河北町の花」を定めるとき、町では迷うことなく「紅花」を町の花に選び、その後、「紅花資料館」を開館し、さらに「紅の館」を増設しました。紅花は人々の心をとらえ、消えかけていた本物の美しさが見直され、紅花を愛する人々の力によって奇跡的に蘇ったのです。





ほりごめ 豪農堀米邸から資料館へ

この資料館は、近郷きっての富豪だった堀米四郎兵衛の屋敷跡です。屋敷の総面積は約80 a がかつては土蔵が6棟、板倉が7棟もありましたが、老朽化が甚だしく、母屋をはじめ多くの建物が整理され解体されてしまいました。この屋敷には武器や生活用品および古文書など5,000点を保存しています。昭和57年にこれらの寄贈を受けた町が、漸次整備修復を加え、昭和59年5月に「紅花資料館」として開館したものです。

堀米家は、元禄の頃から農地の集積を行い、文政年間から明治期まで名主や戸長を勤めた家柄です。その間、米・^{あおそ}青芋・紅花の集荷出荷などによって財をなしてきました。紅花は、文化年間（1804～1818）から精力的に取り扱い、町内でも指折りの豪商に成長しました。蓄積された財貨は、農地の開拓や金融に向けられ、大名貸しも行っていたと考えられます。伊達藩白石城主や庄内藩酒井公の拝領品が保存されていることから推察できます。幕末期における資産の概要は農地が60町歩（60ha）・山林が100町歩（100ha）・貸付金が8,500両・奉公人20名・小作人200名で、本町内では上位の豪農豪商でした。

堀米家の著名な業績として、幕末期の農兵組織への支援と実践活動が上げられます。世相が混沌としてきた文久3年、幕府は治安の維持を目的に、各幕領・私領に対し、農兵取り立てを命じました。この命令を受けた6代目堀米四郎兵衛は率先垂範して農兵の組織立てをし、東北で最高の水準にまで高めました。農兵の編成に関しては一部に反対意見があり、その組織化にはどの農兵頭も苦^{のりかつ}勞しました。堀米四郎兵衛則勝は、西川町吉川の新山神社から由緒譲りになった朱印状を奉安するために、文久3年に御朱印蔵を建立しました。朱印状の保有は將軍の庇護を意味したもので、農兵の取り立てには好都合であり、親類や小作人で167名の農兵を編成し、時折訓練を行い、非常時に備えていたのです。この農兵隊があったため、この地域には百姓一揆や打ちこわしが一件もなかったといわれています。

農兵隊の武器弾薬を収めていたのが武者蔵で、文久3年から5年間、7挺の大砲を始めとする武器や数々の具足が収蔵されていました。堀米家は幕領であったものの、官軍とも幕府軍とも旗色を鮮明にしていませんでした。しかし、これらの武器は戊辰戦争の際、庄内酒井藩や官軍に相次いで接収されるという事態にあります。大砲や武器は庄内軍にとっても必須の用品でしたから、庄内軍が谷地に進出した際、この武者蔵は接収されてしまいました。ついで、庄内軍退却のあとに攻めてきた官軍は、堀米家が幕府に組したと誤解し、四郎兵衛則勝は逮捕されるはめになりました。ほどなく身柄釈放となった四郎兵衛は、堀米^{みのる}実と改名し、明治12年第1回県会議員となり翌年から県会副議長を勤めることになりました。その後、9代目の^{やすたろう}康太郎氏は大正の末、子供の教育のために東京に一家転住しました。長男の^{こうへい}耕平氏は早大、次男の^{ていじ}悌二氏と三男の^{ようぞう}庸三氏は東大、長女の^あ美穂さんは御茶大、四男の^{てつや}鉄也氏は慶大を卒業しました。鉄也氏の娘が世界的バイオリニスト堀米ゆず子さんです。

敷地内の広大な庭園の最も幽邃な場所に、堀をめぐらした御朱印蔵が建っています。文字通り朱印状を保管する蔵です。^{からほふこうはいつきいりもやづくり}唐破風向拝付入母屋造の土蔵で、棟梁は松田仁作、設計及び正面の彫刻は

細谷藤吉、木鼻の獅子は高山文五郎の作です。文五郎は、子の富重とともに能登の総持寺などの彫刻を行った名工の一人で、昔の谷地の職人の伎倆の高さを顕示しています。御朱印蔵は幕府の権威を誇示した建築ですから、明治政府の代になるとすべて取り壊されました。しかし、この地は辺地にあったほか宛名がよその朱印状であったこともあって、難を逃れ残ったのです。御朱印蔵としては県内唯一のものであり、全国的にも極めて珍しい建造物だといわれています。しかし、重要文化財にはなっていません。開館する際に損んだ箇所化粧直しをしたからです。貴重な遺産や由緒のある文化財の保存は難しいものです。

昔の母屋は茅葺きで間口16間(29m)もある大きな建物で、部屋数は15以上ありましたが、今は小さく建て替えてあります。座敷蔵は江戸中期に納戸蔵として建てられた蔵で当町では最も古い形式のもので、内部を座敷にしたのは明治初期で、床の間の蹴込みには鶴と亀の彫刻がほりこんであり、襖絵は伊達藩の絵師、緞斎が安政元年に描いたものです。戸袋の襖の裏に金箔の絵をほどこし、柱は面皮柱をもちいるなど、目だたないところに贅を尽くしている蔵です。多くの日用品などとあわせて、紅花商人の生活がうかがえるように展示してあります。

敷地の奥には昭和61年に竣工した「紅の館」があり、紅花の生産から流通までの様子や紅花から作られたものなど紅花のすべてがわかるように展示されています。

平安時代の初期から林家に伝わってきた舞楽は、9月14、15日に谷地八幡宮で奉納されます。「陵王」は舞楽の中で最も勇壮華麗な舞で、紅染の衣装を着て舞います。

館内には紅花染の染分け見本が展示してあります。紅花からは黄と赤の2種類の色素が出るので、黄染と紅染が染められます。紅色は重ね染めすることによって次第に濃い色になっていきます。一回ごとに新しい紅餅を使いますので、10回染めの深紅は1回染めの10倍の値段になります。黄色と紅色の重ね染めが黄丹で、皇太子殿下の式服(袍)の色です。紅と藍を重ね染めした布は「二藍」と呼ばれ天皇陛下の式服の裏地はこの色です。ほかの人の着用をゆるさない禁色でした。平安時代、深紅の紅花染一反が、公家1軒分の財産に相当したといえますから、紅染の衣装はきわめて貴重だったのです。

レーザーデスクでは、「紅花の生産と流通」「紅染の手法」「谷地どんがまつり」などの番組がみられます。紅花の歴史や生産や流通、さらには紅花染めの手法などがわかりやすく解説されています。紅花は最上川の難所をさけて、大石田まで馬で運びました。馬一匹が運ぶ量は120kgで一駄と呼びました。一駄が取引の単位で、当時約50両、米100俵分の値段でした。大石田からは川船で酒田へ、酒田から敦賀までは北前船で、あとは陸送や水運で京都に上せました。その間、約1カ月、全国の生産量の半分を占めた最上紅花は、その名声を全国にとどろかしました。

紅花を京都に運んだ船は、返り荷として生活必需品をはじめ多くの上層文化をもたらしました。人々のあこがれの的であった紅花染の衣装、女性の唇を愛らしく彩った紅ちょこ、陶磁器、享保雛・古今雛・竹田人形・御所人形など上方の人形たちが、みちのくの地に根強く生き続けながら、今ここに新たな形で花開いたといえるのです。